『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会） 第４巻　第３号　2002月２月　95頁～97頁

＜書評＞

戸所　隆著　『地域政策学入門』
(古今書院、平成１２年)

山　下　博　樹

＜Book Review＞
Takashi TODOKORO：Regional Policy Science

Hiroki YAMASHITA

近年、地域政策が学問の中心的な対象として取り上げられるようになり、全国で多くの関連学部･学科が創設され、その学問的体系化が試みられている。しかし、まだその歴史は浅く、「地域政策学」そのものの確立よりも、関連する様々な学問分野から地域社会への政策的提言が個別に行われているのが地域政策学の現状と評者は考える。その原因は、地域に纏わる政策は極めて多様であり、また幅広い知識が必要とされるからに他ならない。そうした状況の中で、著者戸所　隆氏は果敢にも本書『地域政策学入門』を著した。著者は現在のわが国の地理学会を代表する都市地理学者の一人であるが、その研究業績は常に独創的な着想に基づいて蓄積されてきた。本書は、その著者が「地理学こそ地域政策学の中軸」（p.i）であり、「とくに都市政策の必要度から、都市地理学は重要な位置にある」（p.i）と考え、「地域政策学の基礎としての都市地理学」（p.i）の具現化を試みたものである。

かかる本書の目的は、著者のこれまでの著作を振り返ることによって容易に理解できるので、本稿の目的からはやや逸脱するが簡単にふれてみたい。本書は著者にとって３冊目の単著の著作となるが、最初の著作『都市空間の立体化』（古今書院、1986年）は、著者オリジナルの立体的機能地域分化の視点から都市空間がその拡大に伴って水平的にだけではなく垂直的・立体的にも空間の機能が分化することを明らかにした著作で、その後の地理学や都市計画学などにおける都市空間、とりわけ都心構造研究に大きな影響を及ぼした。次の著作である『商業近代化と都市』（古今書院、

1991年）は、著者が立体的機能地域分化研究と平行して行ってきた都市商業研究をまとめたものである。この著作は、前著が純粋的・基礎的科学としての都市地理学的研究の成果とすれば、著者の参加した現実の商業近代化地域計画や再活性化計画に基づいた記述も多く応用的・政策的側面が強い。当時、わが国の地理学者、とりわけ人文地理学者の間には地理学を基礎学問としてとらえ、研究成果の社会への還元や応用を意識している研究者は極めて少なかったように思う。その点でも著者は実際の行政などとの仕事を通じていち早く政策的応用を意識した研究を行っていた点でも独創的であったと言えよう。そして、第３の著作となった本著はまさにその政策的応用を前面に打ち出した内容となっている。

本著の導入となる第１部は以下の３章で構成されている。第１章では、現代を情報化・脱イデオロギー・交流などをキーワードとする時代と捉え、経済の理論から脱した地域の理論によって行われるべき都市・地域・国土の形成について著者の考えが明確に述べられている。第２章では、著者がバックボーンとする地理学の体系とその応用としての地域政策研究を概観し、地域政策学研究の必要性とその目指すべき体系と方法について説いている。第３章は、著者が考える「地域政策学の基礎となる都市地理学」の基礎的な理論と現代都市の様々な問題点について述べられている。

本論の前半部分となる第２部では、都市政策の基本となる都市的土地利用や都市分布構造、都市構造についてそれぞれ詳述されている。第４章では明治期以後の市街地分布と都市的土地利用の変化を全国の東西での差異に着目し説明している。第５章では、全国の都市分布と国土軸の関連をみた上で、近畿圏の都市分布構造についてその変化の必要性を述べている。第６章では、京都都市圏を例に、郊外核の形成を契機に進展した分都市化の概念を用いて水平ネットワーク型都市構造の意義を詳細に述べている。

本論の後半部分となる第３部では、地方の時代に望まれる個性あるまちづくりのための開発手法や問題点について論じている。第７章では現代日本の都市開発の手法例として東京と京都を挙げ、それぞれの特徴と大津市などでの応用例を紹介している。第８章では、現在全国の多くの都市で深刻化しつつある中心市街地衰退の問題について、その活性化の必要性と方向性、さらにその問題点をアメリカ合衆国都市の先進事例を中心に論じている。第９章では、これからのまちづくりに必要な視点として公的空間と私的空間の問題を挙げ、阪神・淡路大震災復興の事例から21世紀の都市居住のあるべき姿を論じている。終章となる第10章では、「地方分権と規制緩和が進展し、自立的地域政策立案時代が到来してきた」（p.202）なかで、地域政策学における地理学の役割を再確認し、地域政策・まちづくりに必要な政策決定の「過程をいかに科学的に処理するか、その方法論の樹立が問題発見・問題解決能力（政策立案能力）の育成を支援する地域政策学の役割」（p.204）として結んでいる。

本書には多くの著者の中央あるいは地方行政の業務に関わった際の知見や資料が使用されているが、その分析や考察は著者の独創的な考え方によって進められている。もちろんその基本的な部分には都市地理学の基礎理論が流れているが、全般的には戸所地理学の真骨頂と言えるのだろう。そ

のために本著の目的である「地域政策学の入門書」（p.ii）あるいは「地域政策学や都市地理学の教科書にも利用できる」（p.ii）という点には多少の違和感を禁じ得ない。それは再三の繰り返しになるが著者の独創性が随所に発揮されているために、入門書・教科書として利用するには他者が真似できない部分が多分にあると言うことである。また、地域政策学の学問体系の未成熟さのためか参考文献があまり挙げられていないことも学習を目的とする読者にとってはやや不便であろうか。都市地理学の基礎理論を紹介し、多くの図表や写真を用いて読者の理解を助けるための配慮をするなどの工夫がされている点は高く評価される。著者が意図した教養書・専門書としてよりも、高いオリジナリティと専門性を備えた学術書としての性質を強く感じるのは評者だけであろうか。本著のタイトルは出版社の意向で『地域政策学入門』となったそうだが、そのために上述のような違和感を感じることになったと思われる。むしろその内容から『地域政策学の基礎としての都市地理学』と著者の意図するところをタイトルにするのが相応しかったのであろう。しかし、地域政策が抱える多様な問題点を都市地理学の立場から問題発見・問題解決できることを強く主張できたことは、都市地理学のみならず地理学全体にとっても見習わなければならないことであり、同じ地域政策を冠した課程に所属する評者にとってはなおさら重要な指針を示されたことに他ならないのである。

(やました　ひろき・鳥取大学教育地域科学部地域政策課程専任講師)

参考文献　戸所　隆 1986.『都市空間の立体化』古今書院
戸所　隆 1991.『商業近代化と都市』古今書院